

部 長 田 上 昭 典  
研究主任 伊 藤 郁 弥  
部 員 数 2 2 名

## 1 研究主題

豊かな人間性を育む特別活動の創意工夫

## 2 はじめに

研究主題である豊かな人間性を育むために、各校の現状を踏まえて、ねらいに沿う具体的な取り組みや、教育現場ニーズの多様化に伴う時間短縮、新型コロナウイルス感染防止対策を講じる中で、最大限の効果を発揮する取り組みについて、協議をもとに追究している。

## 3 研究経過

- (1) 各校の特別活動の取り組みについて、毎月の研究会でディスカッションテーマを設け、小グループで情報交換し、全体で内容を共有し、協議した。
- (2) ディスカッションテーマについては、実施計画立案前に設定し、今年度の各校の実践に活かせるような計画で活動を進めた。
- (3) 来年度以降を見据え、コロナ禍でも行える体制、各校の実践の工夫を共有した。

## 4 研究の概要

- (1) 5月 <テーマ>運動会と体育祭、文化祭について

アフターコロナを見据え、行事の精選を図りながらもどの程度以前の形に戻していくのかを各校で情報共有した。特に中学校ではクラス合唱の扱いについて各校慎重に進めている状況であり、学年合唱や、体育祭におけるクラスパフォーマンスとのバランスを考えながら取り組んでいる状況である。小学校では、コロナ禍での制限が緩和され、競技内容の幅広い選択が可能となった。かけ声を伴う音遊や、二学年合同での競技を行う予定の学校もあった。

- (2) 7月 <テーマ>児童会、生徒会活動について

小学校であれば代表委員会、中学校であれば生徒議会の運営方法などについて話し合った。子どもたちで議会が進むよう、役割分担を徹底したり、司会進行の工夫をしたりしている学校が多かった。中学校生徒会選挙では、投票に関して紙ではなく、タブレットを活用した投票が増えつつあると昨年度感じたが、forms やロイロノート等を活用した投票が一層浸透しつつあると感じている。立ち会い演説会に関しては学校の規模や感染状況を鑑みて行うという状況であった。小学校の児童会活動に関しては、異学年交流についての話題が多く挙げられた。本格的に縦わり活動を再開したり、各委員会が異学

年交流を意識した活動を行ったりするようになった。高学年児童が主体的に活動を計画する機会を増やすことがねらいとされているようだった。

(3) 9月、10月 <テーマ>卒業生を送る会、感謝の会について

中学校では、昨年同様入試日程が前倒しになっている関係で卒業生を送る会を日課の中で実施する学校は少ない。その中でも、動画で卒業生に感謝の気持ちを伝えたり、委員会が卒業企画を考えたりと、実施ができない中でも各校が工夫を凝らして計画をしているようだった。小学校では、学校の規模にもよるが、昨年度と比較して、卒業生と在校生が対面する形をとっている学校が多かった。合唱を行う予定の学校もあり、コロナ禍を意識した形から以前の形に戻りつつあると感じている。

(4) 11月 <テーマ>運動会・体育祭、文化祭のふり返りについて

小学校では、熱中症対策で開催時期を9月から11月に変更したこともあり、ゆとりをもって運動会の練習ができた。全校実施は難しい段階にある学校も、来年度以降は全校での実施を視野に入れて計画をしているとのことだった。また、運動会当日の運営に関して、委員会をどこまで活用すべきかという話題も挙げられた。中学校では、昨年度挙げられた体育祭と文化祭との間の期間が短く、多忙化を招いたという反省をもとに、行事日程の組み方が話題となった。また、クラス合唱に関しては大半の学校が取り組むも、課題が浮き彫りとなった。生徒の充実感につながる一方で、感染症のリスクも大きく、行事や定期テストに影響が出たという反省も挙がり、日程の確保や感染症対策を今一度確認した上での活動が必要であると感じた。

5 今後の課題

昨年度までの「感染対策をとった上で、どのような実践ができるか」及び、「どの程度以前の形に戻していくか」という話題から、「思い切って戻した結果どうであったか」「他校の動きから次年度はどうしていくか」といった話題へとシフトしていつている。教員の働き方改革、行事の精選を図りながらも、特別活動の本利のねらいや目的を十分考えた上で各校の実態に合わせた活動にしていく必要がある。

今後も他校の実践を共有する場を設定し、特別活動の本質に迫ることができるようになりたい。また、感染症対策とは別に、入試日程の変更、教員の働き方改革など、様々な視点から特別活動の今後が議論されている。行事や生徒会活動の精選は今後必ず必要となってくるが、「活動を通して子どもたちに身につけさせたい力は何か」という視点を教員は忘れてはいけないと感じた。学校ごとに受け継がれてきた伝統行事も、ねらいや意味をもう一度考えることで見えてくるものがあると思う。未来を生きる子どもたちに必要な力を身につけさせられるよう、これからも特別活動のあり方を考えていきたい。